

教育施設における大学生ボランティア活動の研究

——名古屋市「トワイライトスクール」の英語遊びボランティアに注目して——

木村 隆*・竹内政雄*・山田真紀**

A Study on College Students' Volunteer Activities at Educational Institutions
—Focusing on English Language Activities at Nagoya City's “Twilight Schools”—

Takashi KIMURA, Masao TAKEUCHI and Maki YAMADA

1. はじめに

名古屋市教育委員会が実施している「トワイライトスクール」のような、教育施設における大学生のボランティア活動は、年ごとにその事業規模が拡大し、大学生の関心も高まってきている。また最近の教員採用試験においては実務経験を重視する傾向があることから、多くの自治体や大学が、大学生の教育施設におけるボランティア活動参加を奨励している。愛知県や名古屋市も例外でなく、愛知県では「メンタルフレンド事業」、名古屋市では「ふれあいフレンド事業」と「トワイライトスクール事業」を発足させて、大学生ボランティアの参加を呼びかけている。

大学生のボランティア活動をめぐってこのような動きがある中で、筆者らが注目する「英語遊びボランティア」は一体どのようにして始まったのだろうか。「英語遊びボランティア」が生まれた社会的背景としては、次の2つの大きな流れを指摘することができる。すなわち、ひとつは「学校ボランティア」・「学校インターンシップ」と呼ばれる活動の活発化であり、もうひとつは、小学校教育における英語活動の必要性の高まりである。以下では、それぞれの流れについてももう少し詳しく述べてみたい。

「学校ボランティア」や「学校インターンシップ」と呼ばれる小中学校への大学生ボランティア登用の試みは2000年（平成12年）前後から盛んになってきたが、その背景として以下の4つを指摘することができる。第一に、1997年（平成9年）7月に経済産業省・文部科学省・厚生労働省の三省による連絡会議が発足し、同年9月に『インターンシップの推進にあたっての基本的な考え方』が公表された。これにより、大学生が在学中に自らの専門性に合わせて、将来のキャリアに関連した就業体験を行うことが推奨されるようになった。第二に、2002年（平成14年）から学校週五日制が始まって、土曜日に学校施設

* 文化情報学部 文化情報学科

** 人間関係学部 人間関係学科

を有効活用する方が模索されるようになり、これらの活動の担い手として、大学生に期待が集まるようになった。第三に、1996年（平成8年）7月の中央教育審議会答申において「これからの学校が、社会に対して“開かれた学校”となり、家庭や地域社会に対して積極的に働きかけを行い、家庭や地域社会とともに子供たちを育てていくという視点に立った学校運営を心がけることは極めて重要」¹⁾という考え方が示され、従来、閉鎖的といわれてきた学校側が、学校周辺に住む人々に対し、学校活動に積極的に協力してもらおうとする構えを持つようになった。第四に、教員採用において、実務経験や実践力を重視する傾向が強まり、教職を目指す大学生に対し、在学中に学校教育に関わる多様な経験することを求めるようになった。2003年度（平成15年度）には文部科学省がいくつかの都道府県の教育委員会に、地元の教員養成系大学に通う大学生と連携して、「放課後学習チューター」²⁾の実践を研究するよう委託研究を指定するとともに、いくつかの私立大学では、生き残りをかけた「特徴ある取り組み」として、近隣教育委員会と連携して学校ボランティアや学校インターンシップの仕組みを整え、実施している³⁾。

一方、1996年（平成8年）の第15期中央教育審議会第1次答申の中で、小学校での外国語教育の扱いに関する見解が示され、それ以来小学校における英語活動導入に対する関心が高まってきている。この関心の高まりは、2002年（平成14年）における新小学校学習指導要領の施行とともに、多くの小学校において「総合的な学習の時間」の中での英語活動の実施につながり、またその実施を支えるための「地域ボランティア」の活用へとつながっていった。地域のボランティアが小学校に導入されたのは、ほとんどの公立小学校で担任教師が英語活動を指導することになったものの、英語母語話者とのチーム・ティーチングなどを行うのに必要な英語力を身につけている教員がきわめて少なかったことによるものと思われる。

実際、小学校での英語活動に携わる教員等を対象として出版された『小学校英語活動実践の手引』（文部科学省、2001）においては、「より適切な英語活動を行うために、教員免許は持たないが、英語に堪能であったり、外国での豊富な生活経験を持っていたりする日本人や、校区に住んでいる外国人や近隣の大学の留学生などをボランティアとして活用することも工夫の一つである」（p.18）として、地域ボランティアの活用を提案している。

このような、小学校の英語活動に参加する地域ボランティアについての研究報告はいまだ数が限られているが、大学生が参加する例としては、壁谷（2002）や北山（2001）を挙げることができる。38名の短大生ボランティアを小学校に派遣した壁谷（同上）は、英語活動を通して学生と児童との間に良い関係が確立され、経験不足で指導力の未熟な学生ボランティアであっても、指導回数を重ねていくうちに指導についての責任感が生まれたり、より良い指導法を模索する姿勢が見られるようになったと述べ、大学側にとっての教育上のメリットを指摘している。また北山（同上）では、「ボランティアは学生なので大学の教員が小学校の担当教員との間に入り、必要な助言を与えることも可能となる」（p.53）と述べて、大学と学生が連携してボランティア活動を行うことの利点についても言及している。

一方で、特に児童の「しつけ」などに関して、ボランティアと言えども、ある程度は学級経営という点から授業展開を認識する必要があること（北山、前掲書）、また、小学校の学習者の特性や知能の発達段階に合った活動内容を考えることも重要であること（壁

谷、前掲書)など、学生ボランティアの派遣に先立って大学側で指導すべき事柄も指摘されている。先行研究に見られるこのような指摘を考慮すれば、教育施設でのボランティア活動は、大学側の積極的な指導や支援があってこそ十全にその機能を発揮できるものと考えられる必要があるだろう。ただし、教育施設における大学生ボランティアの活動に関する研究はまだ緒についたところである。そのため、大学側のどのような指導や支援が望ましいかについては、全国的な取り組みを俯瞰した上で検討することが求められる。

そこで本研究では、まず第一に、全国的な「教育施設における大学生ボランティア」の実態を整理する。その後、名古屋市の「トワイライトスクール事業」のうち、「英語遊び活動」に着目し、行政と参加学生の双方へのアンケート調査と「英語遊び活動」の見学を実施して、その活動の意義と問題点を明らかにする。さらに、学生の「トワイライトスクール」での「英語遊び活動」へのボランティア参加を支援するために行ってきた本学の取り組みを報告して、教育施設におけるボランティア活動への大学側の支援のあり方について考察したい。

2. 学校ボランティア・学校インターンシップをめぐる全国的状況

(1) 学校ボランティア・学校インターンシップの類型

小中学校への大学生ボランティア登用の試みは「学校ボランティア」「学校インターンシップ」と呼称されることが多い。この両者の違いは、前者は実施主体が「受入先または学生」であるのに対し、後者は「大学」であることから生じる。そのため「学校インターンシップ」として実施されているものは、多くの場合、大学の責任の所在が明確になっており、かつ、一定の活動に対して単位認定をする。しかしながら実際には、厳密に区別されて呼称されているわけではない。そのため、本稿では、以下において両者を明確に区別せず、「学校ボランティア」と総称することとする。

学校ボランティアの主権者という観点から、これらの活動は3つに類型化することができる。「大学主導型」「教育委員会主導型」「個々の小中学校主導型」の3つである。

「大学主導型」の典型的な事例は、「2005年度(平成17年度)特色ある大学教育支援プログラム」として「人間性とキャリア形成を促す学校インターンシップ」の活動が採択された関西大学の取り組みである。関西大学の取り組みの要点は、①教育委員会と協定を結ぶ、②参加希望学生と受入希望学校とのマッチングを大学が行う、③活動を大学の単位として認定する、④事前講習会において活動内容の説明と活動上の注意点について徹底する、⑤学生・大学・受入先関係者・教育委員会の出席のもと、事後報告会を行うという点にある。

「教育委員会主導型」の典型的な事例は、以下にも詳述する名古屋市の取り組みである。名古屋市教育委員会では、「ふれあいフレンド事業」と「トワイライトスクール」の2つの事業を展開しており、名古屋市内や近隣地域に在住もしくは通学する学生に応募を呼びかけている。大学には広報を依頼するのみであり、協定を結ぶことはなく、大学側は所属する学生のうち誰が活動に参加しているのか全く関知しない場合も多い。そのほか、大学と協定を結び、大学側にも積極的な関与を求めながら活動を展開しているものとして、神戸市「スクールサポーター制度」「学校インターンシップ制度」⁴⁾、大阪府「まなびング・

サポーター」⁵⁾がある。

「個々の小中学校主導型」は、地域住民に学校活動に協力してもらうように依頼するものであり、対象は必ずしも大学生とは限らない。地域住民のうち、伝統的な染めの技術を持っているなどの特殊技能をもつ人や、個々の学校が企画実施する活動の手伝いをできる人が人材バンクに登録し、学校の要請のもとに活動を行っている。

(2) 大学における学校ボランティア実施状況

全国私立大学教職課程連絡協議会が会員校を対象として2006年（平成18年）2月から3月にかけて実施した調査から、全国の大学における学校ボランティア実施状況を知ることができる⁶⁾。しかしながら、この調査は「教職課程を持つ私立大学」を対象とした調査であり、「教職課程を持っていても連絡協議会に加入していない大学」「教職課程を持たない大学」「国公立大学」は対象とならない点に留意しなければならない。回答のあった143校（全数の43.2%）のうち、「大学として計画的・組織的に実施している」は34校で回答校の24.6%、「大学として計画的に実施していないが、大学が組織として関与し、学生の参加状況は把握している」が31校で22.5%、「大学として計画的・組織的には実施していないが、教員やゼミ単位で実施している状況は把握している」が24校で17.4%、「大学として計画的には実施していないし、学生の状況も把握していない」は46校で33.3%、「その他」は6校、4.3%であった。この調査から、連絡協議会に所属する大学のうち、3分の2の大学において、何らかの形で学校ボランティアに関与している実態が見えてくる。

全国私立大学教職課程連絡協議会では、第25回全国研究大会（南山大学）と第26回全国研究大会（亜細亜大学）に、学校ボランティアや学校インターンシップについての部会を複数設けて、実践例の紹介や、実施運営上の課題について議論している。そこで出された課題は、以下の5点に要約できる。第一に、大学側の対応体制が未整備であること。学校ボランティアを円滑に進めるためには、実習者と実習の把握、実習校や教委との調整、事前指導・事後指導・訪問指導の実施、学生の抱える困難や問題への対応、単位認定の基準の決定など、大学側がチームとして対応しなければならない場面が多くなるものの、対応すべき人材や組織が未整備である場合が多い。第二に、実習校と学生のマッチングの問題である。学校の希望日と学生の参加可能日が一致しない、十分な学生が確保できない、学生の通学圏内にある学校の確保が困難である、等が指摘されている。第三に、問題が起きたときの体制が未整備であることである。多くの場合、学校ボランティアの運営主体が学生を「ボランティア保険」に加入させることで、事故や器物損壊の問題に対応しているが、指導の難しいケースに直面したり、セクハラ被害を受けたりした場合の相談窓口はほとんど整っていないのが現状である。第四に、金銭的な問題である。交通費の支給がないために、活動が頻繁かつ長期にわたる場合は特に、学生の自己負担は重くなる。また逆に、報酬を払いすぎることにより、学生側に単なるアルバイトであるという感覚を持たせてしまうという問題も生じている。第五に、受入れ校の体制が未整備であることである。学校により、あるいは教員により、ボランティア受入れに温度差があり、教員の雑用ばかりをやらされて子どもたちと接する機会がほとんど持てない、あるいは、ボランティアの大学生に自習監督を任せて、担当教員が教室に来ないなどの問題が生じていることが報告され

ている。

(3) 名古屋市の取り組み

名古屋市教育委員会が実施している学校ボランティア活動には「ふれあいフレンド事業」と「トワイライトスクール」がある。それぞれの活動の特徴は、以下の表1にまとめた通りである。

表1 名古屋市教育委員会の学校ボランティアの取り組み

	ふれあいフレンド	トワイライトスクール（放課後学級）
実施運営主体	名古屋市教育委員会指導室	名古屋市教育委員会が(財)名古屋市教育スポーツ振興事業団の学校開放課に事業を委託
活動内容と実施日	小学校で「お兄さん」「お姉さん」として児童の活動を補助する。 (活動場面：放課時の集団遊び／学級活動や総合的な学習の時間、教科等の授業の時間／児童集会などの集会活動、学校行事) 平日、週1回または2回程度、1回4時間を目安。	①学習ボランティア：月2回の土曜日、午前または午後の2時間程度 ②英語遊びボランティア：月1回程度の平日、午後の2時間程度 ③無償ボランティア：各学校と相談して決める
謝金の有無	謝金あり（1回1,600円。交通費を含む）	謝金あり（「無償」以外は1回1,550円。交通費を含む）
その他	2年間継続することにより名古屋市の小中学校教員採用一次試験の「総合教養」を免除する	2年間継続することにより名古屋市の小中学校教員採用一次試験の「総合教養」を免除する

本稿が分析の対象とする「トワイライトスクール」には、「放課後学級」と「施設開放」の2種類があり、学校ボランティアに相当するのが、「参加を希望する児童」を対象として「児童の学校外活動として実施される」放課後学級である。一方の施設開放は、「一般市民」を対象として「地域の生涯学習や生涯スポーツの場を提供」するために学校施設を開放する活動をさす。

トワイライトスクールの放課後学級は、1996年（平成8年）6月から、名古屋市教育委員会の運営のもと、名古屋市内の2つの小学校で始まった。名古屋市としてトワイライトスクールを開始した経緯は以下のとおりである。「少子化や核家族化などの社会の変化や、地域における地縁的なつながりの希薄化などにより、子ども達は学年の違う子どもと一緒に遊んだり、地域の人々と接したりする機会が少なくなった。そこで放課後などに学校施設を使って学年の異なる友達と自由に遊んだり、地域の人々と交流することを通じて、子どもたちの自主性・社会性・創造性を育むことを目的として、地域が一体となって子どもたちを見守る環境づくりを支援する教育事業としてトワイライトスクールを開始した。」⁷⁾その後、1998年度（平成10年度）から名古屋市教育委員会生涯学習課が財団法人「名古屋市教育スポーツ振興事業団」の学校開放課に運営を委託して現在に至っている。

トワイライトスクール放課後学級のうち、「英語遊び」プログラムは「名古屋市の施策として掲げられている“英語を話せるなごやっ子”を目指して、2005年（平成17年）4月から事業団事業計画書に掲げ、開始された」⁸⁾活動である。なお、この「英語遊び」プ

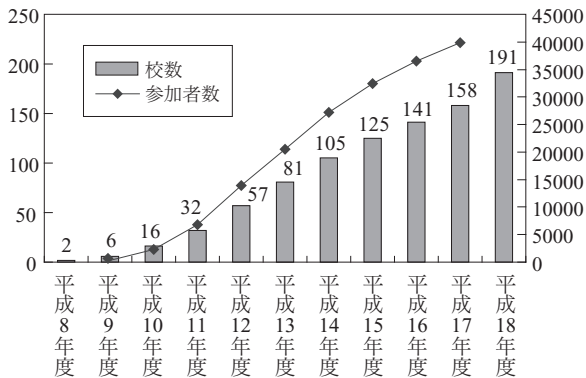


図1 トワイライトスクール開放校数と参加者数の推移

表2 実施校と参加者数の推移

	校 数	参加者数
平成8年度	2	不明
平成9年度	6	361
平成10年度	16	2,277
平成11年度	32	6,789
平成12年度	57	13,921
平成13年度	81	20,533
平成14年度	105	27,224
平成15年度	125	32,438
平成16年度	141	36,501
平成17年度	158	39,875
平成18年度	191	不明

*図1・表2とも、(財)名古屋市教育スポーツ振興事業団『平成17年度要覧』、および同財団提供の資料より筆者が作成

ログラムについては、第3章以降で詳述する。

図1および表2は、トワイライトスクール放課後学級を実施している学校数と参加児童数の経年変化を示したものである。2005年度（平成17年度）の段階で、名古屋市立の全260校の小学校のうち、放課後学級を実施しているのは158校で、全体の60.8%を占めており、また全在籍児童数72,236人のうち、参加申し込みをしたのは39,875名で、全体の55.2%を占める。なお、「英語遊び」の実施校は117校であり、2006年（平成18年）4月～7月現在においては、130校に増加している⁹⁾。

(4) 椋山女学園大学のこれまでの取り組み

2005年度（平成17年度）までの椋山女学園大学の学校ボランティアに対する取り組みは以下の2つである。

第一に、「大学主導型」の活動として、2002年（平成14年）4月より椋山女学園大学附属小学校の土曜教室において、大学生が小学生に勉強を教える「学習ボランティア」を継続的に実施してきた。2年生から6年生までの10クラスのそれぞれに対し、大学生が「担任チーム」を作り、責任をもって教材作りや教室運営を行っている。2003年度（平成15年度）から2005年度（平成17年度）は、授業の一環に組み込むことで単位化したが、2006年度（平成18年度）からは、ボランティア学生の募集を全学部の学生を対象に広げ、単位取得を目的としない無償のボランティアという形になった。2007年度（平成19年度）からは、全学部に開かれる「ふれあい実習Ⅱ（実践）」という授業の実践活動となり、単位化される予定である。

第二に、「教育委員会主導型」の活動の広報を行ってきた。毎年、年度初めに名古屋市教育委員会から学生募集のパフレットが郵送されるため、教職課程委員会が中心となり、教職課程を担当する教員が授業で活動を紹介している。「トワイライトスクール」のうちの「英語遊びボランティア」に関しては、英語担当教員の有志が独自に広報活動を行っている。2006年度（平成18年度）からは、「教育委員会主導型」の活動に対して、大

学側がいかに協力し、活動を意義あるものに活性化していけるかを研究するために、「英語遊びボランティア」に関して、試行的な取り組みを始めている。その内容は以下に詳述する通りである。

3. トワイライトスクール「英語遊び」活動の現状と問題点

(1) 「英語遊び」とは

2002年（平成14年）4月1日から施行された小学校学習指導要領は、「総合的な学習の時間」の取り扱いに関して、「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときは、学校の実態に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習がおこなわれるようにすること」としている。また2005年（平成17年）の愛知万博の開催をひかえて名古屋市は市の国際都市化をめざし、その施策として「英語が話せるなごやっ子の育成」を掲げた。これをうけて名古屋市教育スポーツ振興事業団は、名古屋市の委託事業であるトワイライトスクール（放課後学級）のさまざまな活動の一環として「英語遊び」を事業計画書に揚げ、2005年（平成17年）4月から開始した。トワイライトスクールの放課後学級は「児童の学校外活動」として実施されているが、参加対象は参加を希望する児童であり、授業のある日は授業終了後、授業のない日（主として土曜日）は9時～18時に実施されている。

(2) 「英語遊び」の主旨と内容

2005年度（平成17年度）トワイライトスクールにおける「英語遊び」の実施に関する案内書によると、その主旨は「児童が英語に親しむ機会を増やすことを目的に、2005年度（平成17年度）から、英語を話せるボランティアを講師として、全トワイライトスクールにおいて英語遊びを実施する」ことになっている。

上記の案内書は、「その他」として「これまでの実施校については、17年度も引き続き実施していただき、これにあてる」としているの、2005年度（17年度）以前にも同様の活動が行われていたことがわかる。2003年（平成15年）11月1日には、名古屋市教育スポーツ振興事業団設立20周年記念事業が実施されたが、その一環として行われたトワイライトスクール交流会の来場者体験コーナーにおけるさまざまな活動の中に「英語で遊ぼう」が見られる。また平成15年度の事業に関連して、「放課後学級」の実績として「英語で遊ぼう」の活動を実施した学校数は48校であると報告されている¹⁰⁾。したがって平成17年度より全トワイライトスクールにおいて「英語遊び」が実施される前に、すでに「英語で遊ぼう」の活動が行われていたことになる。この活動の名称が「英語で遊ぼう」、「英語遊び」のいずれにしても、英語を用いて楽しく遊ぶ場を子どもに提供することが主たる目的であることは明らかである。結果的に英語の語彙や文法などを子どもが学習することになったとしても、この活動が知識・技能の習得に主眼を置いているわけではなく、なによりも子どもが早期に英語に親しむことを体験することを主たる目的としていたと考えるべきであろう。活動の内容としては、「英語を使ったあいさつや歌、ゲームなどで遊ぶことを中心に行う」ことになっている。

(3) 調査：アンケートと活動見学

トワイライトスクール及び「英語遊び」ボランティア活動の実態と問題点を把握するために、以下に述べる二つのアンケート調査を実施し、本学のボランティア学生が実際に活動を行っている小学校を訪問して活動の状況を見学した。

1) 行政に対するアンケート調査

対象者：名古屋市教育スポーツ振興事業団学校開放課

実施時期：2006年（平成18年）8月

目的：トワイライトスクール（放課後学級）と英語遊び実施の経緯、全市的な実施状況、行政側がかかえる問題点を把握する。

方法：アンケート用紙を郵送し、資料1に示す質問項目に対する回答を求めた。

結果と考察：

アンケートの回答内容については、すでに述べた点を除いて次のようにまとめることができる。

- ①「英語遊び」の初年度（平成17年度）の実施校は117校であり、今年度（平成18年度）の実施校は130校（平成18年4月～7月の実績）である。
- ②学生ボランティアのうち椙山女学園大学の学生数は、地域協力員（AP）として登録している者が10名、事業ボランティアとして登録している者が19名であるが、両方を兼任している学生が3名含まれているため、実数は26名である。
- ③学生ボランティアの主な所属大学としては、椙山女学園大学のほかに愛知教育大学、名古屋大学、南山大学などがある。
- ④新たにボランティアを始める学生に対しては、事前に事業団事務局で学生との面接・打ち合わせを行い、指導先のトワイライトスクール等の調整を行っている。また、2005年度（平成17年度）に「英語遊び」の研修会、2006年度（平成18年度）に「学びの講座」の研修会を実施している。
- ⑤ボランティアの学生に対しては、トワイライトスクールでの活動中に知った個人情報について守秘してもらうこと、すべての児童に公平に明るく接することなどを指導している。
- ⑥本や教材などは各トワイライトスクールに多少用意してあるが、他に必要な教材等がある場合には、ボランティアと相談して各トワイライトスクールで新たに購入することもある。
- ⑦「英語遊び」の実施に当たってもっとも困っている点は、具体的な指導マニュアルがなく、各学生に指導を一任していることである。
- ⑧来年度にも新たなトワイライトスクールが増えるため、「英語遊び」の実施校も増加する予定であるが、その数は学生のボランティアの応募数による。

以上のように、行政側の実施上の問題点としては、①学生ボランティアの応募者が不足している。②具体的な指導マニュアルがなく、各学生に指導を一任している状態であるので、活動内容にばらつきがある、の2点があげられている。①については、学生の大学における日常の授業との関係や地域の小学校の受け入れ条件、就職活動のために時間が確保できないことなどの原因が考えられる¹¹⁾が、このボランティア活動そのものがまだ十分に

知られていないことも一因であろう。このような活動に関心はあったが、大学の授業で初めて知ったという学生も少なくない。その点で大学として支援すべき部分があると思われる。②については、たしかに専門の知識を持った担当者が望まれるところであるが、予算の関係もあり行政側としては難しい問題であろう。教員養成系の大学や外国語学部のある大学では、適切な指導もできるはずであり、行政側に協力して支援に取り組むことが期待される。

2) 学生に対するアンケート調査

対象者：梶山女学園大学の在学中で英語遊びボランティア活動に参加している者、およびこの活動に関心のある者

実施時期：2006年（平成18年）7月～9月

目的：個々のボランティア学生の「英語遊び」活動内容と問題点を把握し、大学としての支援のあり方を検討するための資料とする。

方法：アンケート用紙を直接本人に手渡し、資料2に示す質問項目について回答の記入を求めた。

結果と考察：

調査対象者のうち全ての質問項目に回答したのは、現在「英語遊び」の活動に従事している7名の学生であった。以下にアンケートの回答内容を集約して記述する。

- ①活動実績としては、2005年（平成17年）6、7月頃から継続して活動している学生が3名、2006年（平成18年）6、7月頃から始めた学生が4名であった。アンケート実施時点でまだ2～3回の経験しか持たない学生が半数以上である。
- ②活動頻度としては、月1回が4名、月2回が3名であり、それを超える学生はいない。
- ③担当している児童の数は、10名程度が1人、15名が2人、15～30名が2人、30～40名が1人、50名が1名であった。各トワイライトスクールにより1グループの人数にかなりの差異がある。
- ④使用教室は学校の普通教室程度の大きさのことが多いが、カーベットの敷いてある部屋を使用していると答えた者が5名、板張りの部屋と答えた者が2名である。
- ⑤教室に備えられている視聴覚機器については、「ビデオプレーヤーとカセット/CDプレーヤーの両方」と答えた者が2名、「カセット/CDプレーヤーのみ」と答えた者が2名、「ビデオプレーヤーのみ」と答えた者が1名、「特になにも備えられていない」と答えた者が2名という結果であった。最近では多くの映像教材がDVDで供給されるようになってきたが、DVDプレーヤーを備えた教室で活動を行っているとは答えた学生はいない。
- ⑥ボランティアの学生が行っている活動例は次のようなものである。
 - ・英語によるあいさつ。身体を使ったゲームと歌（例：「Head, Shoulders, Knees and Toes」, 「London Bridge」), 自作のビンゴゲーム（英語の数字を覚える）。
 - ・ゲーム, London Bridge
 - ・ビデオを見る。アルファベットの文字のカードで遊ぶ。簡単な単語の練習をする。
 - ・その日のゲームに必要な英単語をホワイトボードを使って教える。じゃんけんを英語でやる。英語での数字の言い方を教える。トランプを用いて数字を聞き取ってカード

を探索させる。

- ・英語のあいさつ。自作の魚つりゲーム（文字や絵をかいたカードを、音声を聞いてマグネットを利用して吊り上げる）。英語の歌に合わせて踊る。

⑦ボランティア活動を行う上で困っていることとして、次のような記述が見られる。

- ・天候や行事の関係で参加者が少なくなる。参加人数が一定しない。
- ・児童の人数が多すぎて全員で活動できない。机やビデオがないのでやることが限られる。
- ・児童の英語力のレベルの違い。毎回の参加者の人数がばらばらである。
- ・参加者の人数が少なすぎる。
- ・学年がばらばらなこと。
- ・同じ部屋で英語遊び以外のゲームをしたり、走り回っている子どもがいてやりづらい。

⑧大学側に期待する支援として次のような記述が見られる。

- ・教員とボランティア学生同士の情報交換の場を与えてほしい。
- ・ボランティア学生の集まりを催してほしい。（上記とほぼ同様の趣旨）
- ・使用できる適当な教材を教えてほしい。
- ・教材やアイデアがなくなるのでいろいろ教えてほしい。
- ・情報交換の会や教材提案などをやってほしい。
- ・図書館で子供用の英語のビデオや紙芝居などを貸し出してほしい。
- ・画用紙や文房具等を提供してほしい。

⑨この活動に参加したきっかけとして、多くの学生が「ゼミの授業で担当教員から教えてもらい関心をもった」と述べている。また活動の目的や動機として、幼い頃から英語を学んで楽しかったこと、その楽しさを多くの子どもに伝えたいと思ったこと、子どもとの交流がしたかったことなどをあげている。

⑩アンケートに回答した全ての学生が今後もこの活動を続けていきたいと述べているが、今後の大学における授業の関係で続けられるかどうか迷っている学生もいる。

「英語遊び」の活動がトワイライトスクール（放課後学級）において正式に始められたのは2005年度（平成17年度）であり、まだ歴史が浅いということもあってボランティア学生の活動実績はあまり長くはない。活動の頻度も月に1～2回程度であるので、学生の経験も浅いと言えよう。したがって活動のシラバスが十分に確立しているとは言えず、暗中模索の中で適切な教材の選択・確保や活動内容について苦慮している様子がアンケートの回答内容からもうかがわれる。担当している児童の数は各スクールによってばらばらであり、それぞれの学生のかかえる問題も一様ではない。利用できる視聴覚機器の状況もスクールによって違い、全くなにも備えられていない教室もあり、活動内容が制限されている。そのような状況の中で学生はいろいろ工夫して活動を行っており、特に活動内容については自作の教材を用いて成功しているケースも見られる。大学側に期待する支援として、教員とボランティア学生同士の情報交換の場を与えてほしいこと、適切な教材を教えてほしいこと、教材の提供・貸し出しや、文房具などの提供、視聴覚機器の貸し出しを求めていることがわかる。2006年（平成18年）7月15日(土)には、筆者らが第1回「トワイライ

トスクール英語遊びボランティア参加者の集い」(後述)を開催したが、当日出席できなかった学生も含めて多くの学生がそのような機会を求めていることがわかった。「英語遊び」の活動はまだあまり広く一般の学生に知られておらず、授業の中で紹介されたことによって初めて知ったのがきっかけとなってボランティアに応募した学生も少なくない。ボランティアの学生たちは、苦勞しながらもこの活動を楽しんでいると感じており、できれば今後も続けていきたいと思っている。この点でも大学側の支援体制を充実させる必要があるだろう。

3) 活動見学

活動見学 1

訪問先：名古屋市立野跡小学校（名古屋市港区）

ボランティア学生：椙山女学園大学文化情報学部 3 年生

参加児童：約 15 名

訪問日時：2006 年（平成 18 年）3 月 4 日(土) 10 時～12 時

活動状況と考察：

当日は、見学者である筆者ら（木村・竹内）のほかに、名古屋市教育スポーツ振興事業団事務局学校開放課より英語担当者と専門員、またトワイライトスクールの運営委員と野跡小学校トワイライトスクール専門員も同席した。参加児童は小 1～小 6 の児童約 15 名で、床の上に長机を 6 脚ほど「寺子屋」式に並べて各自机の前に着席していた。活動内容は主として英語の文字や野菜や動物の名前の単語を書くことを覚えるためのプリント学習であった。児童はプリントの英単語やアルファベットの大文字を書写し、ボランティア学生に見てもらっていた。ボランティア学生は各自のプリントを添削したり、よくできたプリントには花マルをつけたりしていた。1 枚のプリントを完成させると「運営委員」の先生から新しいプリントを受け取る。その際「運営委員」の先生はプリントの絵だけを見せて英単語を口頭で言わせるなど、ちょっとしたテストを行っていた。1 年生から 6 年生までの児童がいるので、学年に応じたプリントを用意するのは結構大変そうであった。この活動は、歌を歌ったり、英語の歌に合わせて身体を動かしたり踊ったりする英語遊びとは違い一見退屈そうな単純作業であったが、児童たちはリラックスした感じで楽しそうにしていた。児童とボランティア学生の関係は非常に好ましく、心の通い合っている様子が十分にうかがえるものであった。運営委員の話によれば、子どもは「遊び」を期待してトワイライトに来るので、「勉強」させるのは難しいということであった。「遊び」と「勉強」の住み分けについては、例えば、活動の前半に音楽などを使った英語の遊びを全員で行い、文字を使った指導は後半部で個人指導として行うといいように思われた。このボランティア学生は比較的物静かであり積極的に発言するタイプではないが、真面目で熱心であり教材の作成もすべて一人で行っていた。運営委員や AP（アシスタントパートナー）がいっしょに参加するという形の活動であるという点が特徴的であった。運営委員の人は、「年間カリキュラムがないので、それを作ってもらえたら助かる」とコメントしていたが、そのあたりにも大学側が関わって支援すべき面があるように感じられた。

活動見学 2

訪問先：名古屋市立浦里小学校

ボランティア学生：文化情報学部 4 年生

参加児童：約 15 名

訪問日時：2006 年（平成 18 年）3 月 18 日（土）

10 時～12 時

活動状況と考察：

見学者は木村と竹内であり、他に専門員の多川氏、運営委員の森氏、サポート系の女性が参加した。浦里小学校の学区には中国人の居住者が多いため、児童の中にも日本語の補充授業を必要とする者がいるとのことであった。トワイライト参加児童の中にも中国人の子どもがいる。トワイライト



写真 1

用の教室は二つあり、一つは畳敷き、もうひとつはカーペット敷きである。当日の活動はカーペット敷きの教室で行われた（写真 1）。参加児童は小 1～小 5 までの約 15 名であった。

最初の活動は「Head and Shoulders」で、まず“head”, “knees”, “toes” など、体の部分を表わす英語の復習であった。子どもたちはみんなスラスラとすることができるようになっていた。二番目の活動は、「ロンドン橋」のお遊戯であったが、子どもたちはこの遊びが大変気に入っている様子で、「もう 1 回」とボランティア学生にせがんでいた。三番目の活動は、色の名称を使ったグループ作りの遊びであった。ホワイトボードに、いくつかの色の名前を英語と日本語で書き、まずはそれを発音、続いて児童に星型に切った、さまざまな色の紙を 1 枚ずつ渡す。そのあとボランティアの“Yellow!” などという掛け声で、子どもたちは手をつないでベアになる。当日初めて行ったゲームとのことであった。

四番目の活動は、鬼が“money”と言ったら両手を受けるように前に差し出し、“stone”と言ったら両手で頭を隠し、“thunder”と言ったら、両手でおへそを隠すゲームであった。このゲームもこの日が初めてのゲームとのことであったが、よく工夫・準備されていたと感じた。ゲームを行う前にも、“money”, “stone”, “thunder”という英単語の導入があった。ゲームのやり方に慣れて順調に進むようになった頃、“wolf”という新しい単語が追加され、鬼がこれを言ったら床に腹ばいになるという動きが加わった。巧みな展開の仕方だと感心した。1 時間あまり体を動かしたあとは、まとめとして当日の活動で出てきた単語をひとつずつ声に出して言っていた。みんなよく定着している。前回までの復習から始める「導入」、新しい活動を含めた「展開」、学習内容を整理しての「まとめ」と、セオリーどおりの進行であった。

四番目の活動は、このボランティア学生が子どもの時に通っていた英会話塾の体験や、大学 1・2 年の時にやっていた児童英語塾のアルバイトの体験をもとに工夫してみごとに英語遊びに仕立てた創作のアクティビティであり、他のボランティア学生にも大いに参考になると思われた。これから「英語遊び」の活動に参加する学生にもぜひ見学の機会を与えたいと思う。

上記のアンケートや活動見学以外にも、学生の話聞いてみると、適当な教材が見つからないこととか、年間を通じてどのような指導計画ですすめたらいいのかわからず困って

いることなどが問題であることがわかる。昨年度からボランティア活動をしている一学生は次のように述べている。

私は今、小学校で英語遊びのボランティアをしています。小学校低学年の子どもは「英語ってなに？ 小文字？ なにそれ？」という世界なんですね。小学生に英語を使って遊ばせることはとても難しく、私はいつも授業化してしまい、子どもたちもつまらなさそうです。自分で作るプリントに絵を加えてみたり、カラフルにしてみたりと色々考えることばかりです。早くパターン化したいです。

上記の学生は英語遊びの活動に真面目に取り組んではいるが、「授業化」してしまい、楽しい遊びになっていないこと、毎回の活動が「パターン化」されていなくて適切なシラバスができていないことに悩んでいることがうかがえる。このようなボランティア学生の支援のために大学としてはどのようなことができるであろうか。本学の「教育施設における大学生ボランティア活動の研究会」では、2006年7月5日に第1回「トワイライトスクール英語遊びボランティア参加者の集い」を開催したが、その詳細及び本学におけるその他の活動支援の取り組みについては次章に述べる。

4. 本学における活動支援の取り組み

(1) 2005年度（平成17年度）までの取り組み

筆者らの知るかぎりにおいて、本学の学生が初めてトワイライトスクールの英語遊び活動に参加したのは2004年度（平成16年度）である。その学生は筆者（木村）のゼミ生だったため、筆者がその学生に対して、小学校児童への接し方や活動上の注意事項について助言を与え、また英語遊び活動の内容やアクティビティープランの作り方などについて指導を行った。さらに、手元にある教材を貸し出して、学生にとって初めてだった英語遊び活動がスムーズに進行するように援助をした。なお、この学生はその後、トワイライトスクールでのボランティア活動経験を卒業論文としてまとめている。

2005年度（平成17年度）には、この学生が下級生に参加を呼びかけ、また筆者ら（木村・竹内・山田）が名古屋市教育スポーツ振興事業団学校開放課の広報資料を掲示・配布したこともあって、何名かの学生が英語遊び活動に参加するようになった。これらの学生のうち、筆者らが活動参加を把握している者については、2004年度（平成16年度）と同じように、個別に活動内容の相談に応じたり、教材・教具を貸し出したりしていたが、相談内容を聞いているうちに、参加者が様々な悩みや問題を抱えながら活動を実施していることがわかり、大学として組織的な支援を行うことが必要であるとの認識を得るに至った。また、このような個別の指導体制では、特定の教員の身近にいる学生しか支援を受けられないことも問題点として感じられるようになってきた。教員の目に留まっていない学生に対しても支援の手が差し伸べられれば、大学としてこのボランティア活動をさらに教育的に意義のある活動にすることができるのではないかと考えた。

(2) 2006年度(平成18年度)の取り組み

そこで、今年度筆者らがまず目指したのは、①教員を含めた活動参加者のネットワーク化、②教材・教具の収集、③教材・教具の使い方に関する情報交換、④英語遊び活動に関するワークショップの開催である。この取り組みを実施するために、学内に筆者ら3名の教員からなる「教育施設における大学生ボランティア活動の研究会」を立ち上げた。

7月には、上記の目標の実現を目指し、この研究会で第1回「トワイライトスクール英語遊びボランティア参加者の集い」(以下「集い」とする)を開催した。この集いの対象としたのは、本学学生のうち、現在「トワイライトスクール」(英語遊びボランティア)に参加している者、および「トワイライトスクール」(英語遊びボランティア)に関心のある者である。

各学部の掲示板に案内文書を掲出して出席者を募ったところ、人間関係学部、文化情報学部、国際コミュニケーション学部、現代マネジメント学部から合計8名の出席者があった。また6名の学生からは、当日は都合で出席できないが、今後の集会には参加したいとの連絡があった。

本学で初の試みとなるこの「集い」の第1の目的は、活動参加者のネットワークを構築することである。したがって、「集い」の冒頭でこの旨を出席者に伝え、次いで自己紹介に移った。自己紹介では、この活動自体をトワイライトスクールの英語遊び活動としても活用することができるように、英語を使ったゲーム形式¹²⁾で行った。

ゲーム仕立ての自己紹介を通して全員が打ち解け合ったところで、お互いの情報交換を行った。出席者の一人ひとりから、現在どこでどのような活動を行っているか、またどのような英語遊びがうまく行っていて、どのような困難点を抱えているか等について報告があった。それぞれの報告の後、学生相互の意見交換や筆者ら教員からの助言も行った。この情報交換を通して、英語遊びボランティア活動を行っている学生が最も困っていることのひとつが、英語を使った遊びのアイデアであるということがわかったため、この後は早速、学生有志と教員による英語遊び活動のワークショップに移った。

ワークショップでは、学生1名と筆者ら教員3名が英語遊びアクティビティーを紹介するとともに、出席者全員が児童役となって、アクティビティーを体験した(写真2)。学生から紹介があったアクティビティーは「Head, Shoulders, Knees and Toes」「London Bridge」および「Falling Down, Falling Down」である。この3つは、前章の3)でも述べられているように、筆者らが活動現場を訪問した際にも児童が大変楽しそうに行っていたものである。「Head, Shoulders, Knees and Toes」と「London Bridge」は欧米の幼児に大変人気のあるアクション付の歌であるが、「Falling Down, Falling Down」はこの学生が日本の遊びを応用して作り出したオリジナル・アクティビティーである。

筆者ら教員は、「みんなでイングリッシュ」(資料3)、「Let's Sing Together」(資料4)、



写真2

「共同絵画」(資料5)と題するアクティビティーを、実演を交えて紹介した。筆者のうちの1名(山田)を除いて、これらのアクティビティーを児童に対して実施した経験はないが、小学校児童の特性や興味・関心に合致しそうな活動であることから出席者に紹介した。

最後に、今後筆者らがこの研究会を通して行う予定の支援の内容や、参加学生からの要望事項について話し合った。今回の集いのために筆者らが準備したものは、①「活動に役立つ教材・参考文献リスト」と②「この本(教材)についての感想とアドバイス」(資料6)である。前者は3名の教員が個人研究室等に所蔵する教材集(CDやDVDを含む)や参考文献を一覧表にしたものであり、後者は、ある教材を使用した者が次にそれを使用する者のために、児童の反応や次に使う人へのアドバイスなどを記入するための用紙のことである。前者のような一覧表があれば、ボランティア参加者は教員から教材を借りやすくなるであろうし、後者のような、使用者の感想・反省を含んだ記録がファイルに保存してあれば、参加者が英語遊びのアクティビティーを計画する上で貴重な資料になるだろう。

今年度後期については、上記の集いを発展させた形で、昼休み時間を利用した「教材教具展示会」や、授業後や週末の「指導技術研修会」を開催していく予定である。また、今年度交付された学園研究費助成金を有効に使って、教材集・CD・DVD・ビデオなどの教育資料、DVDプレーヤーなどの教具、さらに色紙・画用紙・絵具などの消耗品を取り揃え、参加学生が学内で気軽に教材を準備することができるよう便宜を図っていきたいと考えている。

5. まとめと今後の課題

以上、本稿では、トワイライトスクールでの「英語遊び」活動に焦点を当てて、教育施設における大学生のボランティア活動について考察し、大学がボランティア参加学生に対して提供できる支援の一例として、本学における取り組みを報告した。

学校ボランティアや学校インターンシップに関して全国的な取り組みを調査した結果、本研究で注目しているトワイライトスクールは、「教育委員会主導型」事業の典型的な例であること、また、学校ボランティアを実施している大学には、各大学が共通して認識している課題がいくつかあることなどがわかった。

トワイライトスクールを実施している行政側、および「英語遊び」活動に参加している学生を対象に行ったアンケート調査からは、これらの課題と共通する問題点のあることが明らかになった。行政側が実施上の主要な問題点として認識しているものは、①学生ボランティアの数が不足している、②具体的な指導マニュアルがなく各学生に指導を一任している、の2点であったが、これらはいずれも第2章で報告した「全国私立大学教職課程連絡協議会全国研究大会」において、学校ボランティア・学校インターンシップ実施運営上の課題として指摘されたものである。上記①については、広報の問題であると同時にトワイライトスクールと学生とのマッチングの問題でもあり、トワイライトスクールの希望日・時間帯と、学生の希望日・時間帯が一致しない、また、ボランティアを募集しているトワイライトスクールの所在地と学生の通学圏が一致しないこと等が原因のひとつとなっている。ボランティアへの参加を希望している学生が、条件の合うトワイライトスクール

を見つけれないために参加を断念するのはいかにも残念なことである。効率的な人材マッチングシステムの構築が望まれる。

上記②の問題点については、「英語遊び」活動に参加している学生が困難に感じている点と見事に一致する。学生に対するアンケート調査からは、「適切な教材の選択・確保」や「活動内容の計画・立案」に困っていることが示されているが、この点に関して行政側も自らの問題点として認識しているということである。同時に、これは第2章の(3)で指摘されているように、「大学側の対応体制の未整備」と言うこともできる。学校ボランティアを適切に進めるためには、前述のとおり、事前・事後の指導や学生の困難への対応など、大学がチームとして対応していくことが必要だが、本学においては対応すべき人材や組織が十分とは言いがたい。本学では、「大学主導型」の活動として「学習ボランティア」を実施し教育効果をあげているが、トワイライトスクールのような「教育委員会主導型」の活動に対しても、広報への協力だけにとどまらず、児童の特性や知的発達に合わせた英語遊びの内容や指導方法についての研修会を開催するなど、大学としての組織的な協力体制が望まれるところである。

上記のような問題点があることがわかった一方で、トワイライトスクール「英語遊び」でのボランティア活動が、現場のスクールや児童にとって、また参加している学生自身にとっても、意義深いものであることが示された。第3章の(3)で述べたように、筆者らが「英語遊び」の活動見学に訪れた際、児童たちはボランティア学生に全幅の信頼を寄せ、学生との文字通りの肌のふれあいを心から楽しんでいる様子がうかがわれた。また運営委員は、このスクールでの「英語遊び」活動の運営に対して、本学生が大きな貢献をしていることを語っていた。

学生へのアンケート調査では、参加学生たちは「英語遊び」ボランティアを楽しんでいると感じており、アンケートに回答した全ての学生が今後もこの活動を続けていきたいと答えている。「英語遊び」ボランティアの歴史は浅いが、1年以上活動をしている学生の指導内容や活動の展開の仕方には、目を見張るようなものもあった。このことは、ボランティア活動への参加が学生自身の成長につながっている証のひとつとして、考えてもよいのではないだろうか。

本稿では、トワイライトスクール「英語遊び」ボランティア参加学生に対する、平成16年度から今年度までの活動支援の取り組みについても報告したが、今後重要となってくることは、このような活動支援を通して、ボランティア活動に参加する学生の知識や技能を高めていくと同時に、それらが後に続く学生に適切に継承されていくような仕組みを作ることである。学生は在学期間の4年が過ぎれば大学から巣立ってしまうため、何も仕組みがなければ、せっかくそれぞれの参加学生が貴重な体験を通して蓄積した知識や技能が、他に継承されずに埋もれてしまう可能性がある。参加学生のネットワークがスムーズに機能するようになれば、年度当初に参加者・希望者の全員を集め、新規参加希望者への案内と、参加学生による活動報告を同時に行うことによって、新しくこの活動に参加する学生が先輩の知識・技能を受け継いで現場に生かすという、知識・技能の循環システムを作り出すことができる。

「教育施設におけるボランティア活動」に対する大学としての協力体制は、活動現場で求められることに対して支援を行い、ボランティア活動を通して学生の知識や技能を高め

ていくと同時に、このような知識・技能の循環システムの構築をも念頭に置いて整備していくことが必要であろう。

注

- 1) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/960701.htm
- 2) 文部科学省は「確かな学力の向上」のために、平成15年度より「学力向上アクションプラン」を実施しており、その施策の一つが「放課後学習チューター」である。「放課後学習チューター」は、将来教員になろうとしている大学生（大学院生）が、放課後に小中学校において個別指導をし、生徒の学力向上に寄与するとともに、教員という仕事に対する理解を深めてもらうことをねらいとしている。
- 3) 私立大学の取り組みとして典型的なものは、後述する関西大学の事例である。その他、京都産業大学でも積極的に取り組んでいる。
- 4) 洲脇一郎「神戸市におけるインターンシップ制度について」全国私立大学教職課程研究連絡協議会第25回研究大会（南山大学）要旨集34頁。
- 5) <http://www.pref.osaka.jp/kyoisityoson/shochu/kyoumu/ver.4/gakuryoku/manabing/youkou.pdf>
- 6) 芦原典子「全国調査からみえる実態と課題」全私教協第26回研究大会（亜細亜大学）発表資料。
- 7) 「教育施設における大学生ボランティア活動の研究会」（代表：木村隆）が、名古屋市教育委員会に協力を依頼した「トワイライトスクール及び英語遊びについてのアンケート」で得られた回答より。
- 8) 7)に同じ。
- 9) 7)および、名古屋市教育スポーツ振興事業団編『平成17年度要覧』を参照。
- 10) 名古屋市教育スポーツ振興事業団平成16年度評議員会。
- 11) 筆者らの知るかぎりにおいても、授業やアルバイト・就職活動の日程と重なるためにトワイライトスクール「英語遊び」ボランティア参加を断念した例が数件ある。
- 12) 最初の人“Hi! I'm Junko. Nice to meet you.”と言って自己紹介し、次の人は“Hi! I'm Miki, next to Junko. Nice to meet you.”というように、先の人の名前を含めて自己紹介をする。10人の人がこのように順番に自己紹介していくと、最後の方は9人の名前を暗唱して自己紹介することになる。くり返し名前が出てくるので、グループメンバーの名前を覚えるのに適した活動である。

引用文献

- 壁谷一広（2002）「地域ボランティアを使った総合的な学習の時間における英語活動に関する考察」『東北英語教育学会研究紀要』第22号，123-135。
- 北山長貴（2001）「小学校英語におけるボランティア活動——Scaffolding の重要性」『The LCA Journal』，49-59。
- 文部科学省（2001）『小学校英語活動実践の手引』東京：開隆堂出版。

資料1 トワイライトスクール及び英語遊びについてのアンケート

I. トワイライトスクールについて

- 1 トワイライトスクール事業はいつから始まりましたか。
- 2 トワイライトスクール事業を始められた経緯について簡単にお示しください。
- 3 トワイライトスクールの初年度の実施校は何校でしたか。
- 4 トワイライトスクールの今年度の実施校は何校ですか。
- 5 年度別の実施校の数がわかりましたら教えてください。
- 6 トワイライトスクールの行政上の実施組織をお示しください。
- 7 トワイライトスクールに対する学生ボランティアの応募状況はいかがですか。
①応募者が多くて困る ②応募者の数は適当である ③応募者が不足している
- 8 事業の実施において最も苦勞される点はどんな点でしょうか。

II. 「英語遊び」について

- 1 「英語遊び」の正式の名称は？
- 2 「英語遊び」のプログラムはいつから始まりましたか。
- 3 「英語遊び」の初年度の実施校の数は何校でしたか。
- 4 「英語遊び」の今年度の実施校の数は何校ですか。
- 5 年度別の実施校の数がわかりましたら教えてください。
- 6 学生ボランティアのうち梶山女学園大学の学生は何名でしょうか。
- 7 学生ボランティアの主な所属大学と、およその数を教えてください。
- 8 新たにボランティアを始める学生に対して説明会やオリエンテーションを行っておられますか。 ① はい ② いいえ
- 9 ボランティアの学生に対して注意や心構えを与えておられますか。
① はい ② いいえ
- 10 担当部署としてボランティアの学生に最も注意してほしい点はどのようなことですか。
① ② ③
- 11 学校開放課としてボランティアのための（貸出し用）教具・教材等をお持ちですか。
① はい ② いいえ
- 12 「英語遊び」の実施に当たって最も困難な点はどのようなことですか。
① ② ③
- 13 来年度「英語遊び」の実施校は増える予定でしょうか。 ① はい ② いいえ
- 14 「英語遊び」の実施組織をお示しください。
- 15 「英語遊び」を実施している地方自治体があれば教えてください。
- 16 学生ボランティアの所属大学に対して指導上の要望がありましたら教えてください。

資料2 トワイライトスクール英語遊びボランティア活動についてのアンケート

- 1 あなたが活動している小学校について 名古屋市立_____小学校
- 2 活動実績 平成_____年_____月より
- 3 活動頻度 1ヶ月に_____回程度
- 4 担当している児童の人数と学年
合計_____人（1年生_____人, 2年生_____人, 3年生_____人,
4年生_____人, 5年生_____人, 6年生_____人）
- 5 英語遊びを行っている教室について

教育施設における大学生ボランティア活動の研究

- 大きさ： 幅____メートル×奥行き____メートル
○床の仕上げ： 板張り，カーペット敷き，その他（ ）
- 6 教室に備えられている視聴覚機器（該当するものを○で囲んでください）
ビデオプレーヤー カセット/CD プレーヤー DVD プレーヤー
その他（ ）
- 7 活動時間をどのように使用していますか？ 大まかな活動の流れ（パターン）を教えてください。
- 8 うまくいったアクティビティーや気に入っているアクティビティーがあれば，教えてください。
- 9 このボランティア活動を行う上で困っていることはありますか？
- 10 活動先の小学校や運営委員の方に要望はありますか？
- 11 大学にはどのような支援をしてほしいですか？
- 12 あなたはどんなきっかけや目的（動機）でこの活動に参加することにしましたか？
- 13 今後もこの活動を続けていきたいですか？ その理由は何ですか？

資料3 ワークショップで教員が紹介したアクティビティー（1）

教材名：和田稔（監修）「みんなでイングリッシュ〜うた&絵カード ステップ1」

紹介者：竹内政雄

出版社：TDK コア

《教材について》この教材は，62枚の絵カードとCD 2枚から成っています。あいさつの表現や，数，果物の名前，家族，曜日，色や形の名前，動作などの指導等，多様な活動に使用できます。

《使い方》CDには，“Head, Shoulders, Knees And Toes”や“ABC Song”，“If You’re Happy”などいろいろな歌が入っていて，くり返し聞けるようになっており，カラオケバージョンもあるので楽しい活動ができます。絵カードも子どものレベルに応じて使えそうなものを選んで使うといでしょう。子どもに1枚ずつカードを持たせたり，カードを見て絵を描かせたり，いろいろ工夫して遊ばせよう。

《参考》小学校「総合的な学習の時間」のための教材ですが，対象の子どものレベルに応じて，適当に選んで使うとよいでしょう。教師用解説書もあるので，「うたの利用方法」がわかります。絵カードも色がきれいで，すっきりしています。

資料4 ワークショップで教員が紹介したアクティビティー（2）

教材名：「Let’s Sing Together」

紹介者：木村 隆

出典：阿部フォード恵子（2004）『New Let’s Sing Together Song Book』，東京：アプリコット

《内容》動作をつけて楽しく歌います。うまく歌えるようになったら，3部輪唱をします。ハーモニーができあがると一体感が生まれますよ。応用として，歌詞の中のsingを他の動詞に替えて歌い，動作もつけます。

《準備》この曲の入ったCDとCDプレーヤー。他の動詞に替えて歌う場合には，動詞の動きを絵で表したカード。

《やり方》

- ①全員が輪になって手をつなぎます。
- ②前奏から、歌の Sing, sing together のところまで、つないだ手を大きく前後に振ります。
- ③ merrily, merrily sing. では、つないだ手を離し、隣の友達と 4 回手を打ちます。
- ④最後の Sing, sing, sing, sing. の部分は手を放し、両手を胸の前に組んでオペラ歌手のように歌います。
- ⑤うまく歌えるようになったら、子ども達を 3 グループに分けます。第 1 グループが 5 小節目に入るとき、第 2 グループが歌い始めます。第 1 グループが 9 小節目に入るところで、第 3 グループが歌い始めます。数回繰り返すうちに 3 部輪唱になります。
- ⑥歌詞の中の sing を他の動詞に変えて歌います。動詞の動きを描いた絵カードを子ども達に示して、その動作を真似しながら歌わせます。

《参考》指導者はしっかりと歌詞を覚え、弾むように明るく楽しく歌うことが大切です。低学年の児童の場合には輪唱が少し難しいかも知れませんが、第 2 グループ・第 3 グループの出だしのところでは、大きなジェスチャーで合図してあげましょう。

Let's Sing Together

Sing, sing together,
merrily, merrily sing.
Sing, sing together,
merrily, merrily sing.
Sing, sing, sing, sing.

資料5 ワークショップで教員が紹介したアクティビティー (3)

教材名：「共同絵画」

紹介者：山田真紀

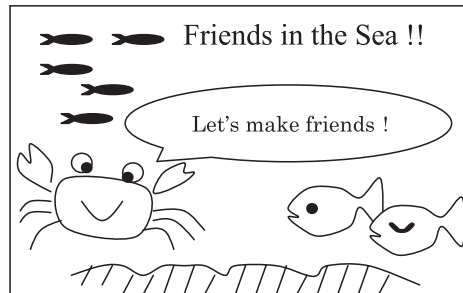
出典：産業能率大学三好良子先生のワークショップ記録を参考に作成

《内容》お手本の絵や英語の文章をできるだけ正確に再現するゲームです。最も正確に再現できたチームが優勝となります。

《準備》4 人～6 人のグループを作り、各グループに B4 の紙 1 枚とサインペンを配布します。B4 の画用紙にお手本の絵や英語の文章を描き、それを教卓の裏や教室外側のドアなど、子どもたちからは見えないところに貼ります。採点用にお手本を縮小コピーしたものをグループ数分準備しておくといいです。

《やり方》ゲームを始める前にグループ内でじゃんけんをして一番勝った人を決めます。ゲーム開始の合図とともに、一番勝った人がお手本を見にいき、頭に絵の内容を刻み込んで戻ってきて、描けるところまで絵を再現します。一人が帰ってきたら次の人が見にいきます。グループ内で 2 人以上が同時にお手本を見に行ってははいけません。最初に鉛筆書きしてアウトラインを決めてから、サインペンでなぞるなど、グループ内で作戦をたてて戦います（鉛筆書きでは採点されません）。制限時間は絵や英語の文章の複雑さと子どもたちの年齢を加味して決めます。目安は 5 分間。制限時間が終わったら、グループ間で絵を交換して、お互いに採点をします。お手本を縮小コピーして配布すると採点がスムーズにできます。それを先生が集めて、どの作品が最も忠実に絵や英語の文章を再現しているかを判断し、優勝チームを決めます。

《参考》お手本はシンプルなものの方がよいです。以下にあげた例は、魚の数、位置、英語の文章が採点のポイントになるように工夫してあります。



資料6 この本（教材）についての感想とアドバイス

★この本（教材）についての感想とアドバイス

次にこの本（教材）を使う人がよりうまく教材を活用できるように、下の欄に記入してください。

教材名	英語の歌 & アクティビティ集
編著者	アルカ キッス"英語編集部 平井佐知子
出版社	アルカ
使用したクラス	(1)年生(3)人: (4)年生(3)人 (2)年生(5)人: ()年生()人 くらい (3)年生(5)人: ()年生()人
使用法と児童の反応	最初に Head sholder への曲にでてる体の部位を "Touch your head" などにうって頭を覚えてから曲 をのけてGameしました。慣れてきたらペアを組んで"sholder のときに相手の肩をタッチ。最後にもう一度"Touch your -"と
次に使う人へのアドバイス	最初に"Touch your -"のフレーズをいっしょに動作 することを覚えたので"最後は応用で"Wash your hands" などの動作もできました。最初より自分も動作しながら みんなでやるのを繰り返して慣れてあと、子どもたちだけに やってもらうといいと思います。
その他（感想などあれば）	1学年の子どもたちはみんなで"手を洗う"をしたり あるのが好きみたいで"盛りあがり"しました。

体の部位も覚えてみんな楽しんでやってくれました。

記入日: 平成 18 年 7 月 28 日

記入者: 学部・学年 (文化情報) 氏名 ()
2 年